SEG® 英語多読 授業見学レポート

英語特有のリズムを身体全体で身につけることができる「英語多読」の外国人パート

数学の専門塾として知られるＳＥＧは、近年、英語塾としても高い評価を得ている。その理由は、英語多読というユニークな授業方法を採用した結果、高い英語力が身につくことが証明されているからだ。中学から英語を学び始めた生徒が、中1から英語多読に通い続けたことで高校卒業までに英検®１級を取得するケースも少なくない。今回はＳＥＧ6年間のカリキュラムの中で、最初の授業にあたる「新中1春期講習」に参加した。

出欠確認時の英会話で英語の世界へ引き込む

ＳＥＧの英語多読の授業は、多読パートと外国人パートで構成されている。多読パートは自分のレベルや興味にあわせて選んでもらった英語の本を、難易度を調整してもらいながらたくさん読んでいく授業。外国人パートは外国人講師との英会話やアクティビティを通して、英語のリズムや英語特有の言い回し、文法などを体感していく授業だ。これら２つのパートを組み合わせることで、「生きた英語」を身につけることを目指している。

今回紹介するのは、中学入学前の春休みに実施された新中1の春期講習だ。クラスレベルはＢで、小学生の間にある程度英語を学んだ生徒を対象にする中級クラスである。今回は２つのパートのうち、外国人パートを紹介しよう。

ＳＥＧの英語多読のクラスは普段はとてもにぎやかだが、新中1の春期講習では基本的に初対面同士ということもあり、教室内はとても静かだ。

授業開始の少し前に教室に入ってきた Taylor 先生は、開始時刻になったのを見て“OK! Let’s study. Are you ready for day number……?”とある生徒に話しかける。その生徒が“Three.”と答えると、“OK! I’m ready for day number three.”と返し春期講習の３日目であることを確認させ、続いて“Do you remember my name?”と問いかける。全員が“Taylor.”と即答すると、先生は、“Nice!”と笑顔を見せ、出欠確認に入る。

外国人パートでは、出欠確認の際に必ず先生との会話が行われる。先生が今日の気分や昨日までに起こったことなどを生徒に問いかけ、その答えにさらに質問を投げかけながら、身近な話題に関する英会話を行う形式がＳＥＧでは一般的だ。

先生は一人ひとり生徒のファーストネームを呼び“Hello!”と呼びかけ会話を続ける。たとえばある生徒とは“How are you today?”“I’m……fine.”“You’re fine. Good, good, good. What did you do yesterday?”“I……? I played handball.”“Was that exciting?”“Yes.”“OK, good, good. Did you win?”

“Ah……, Practice.”“Oh, just practice. Very nice.”といった具合だ。

生徒の一言一言に大きくリアクションを取り、ほめる言葉を何度も加えていくのが印象的だ。かなり大げさに聞こえるが、これが英語のリズムの基本であり、最初の会話を通して日本語から英語の世界へ一気に引き込んでいくことが目的なのだろう。

なお、本稿では読者の理解のために日本語で表現する箇所もあるが、先生も生徒も話す言葉はすべて英語であることを念のため書き添えておく。

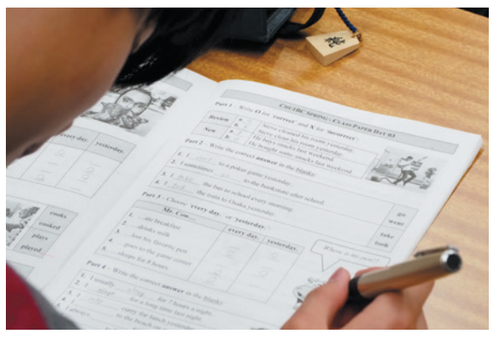
映像を使って英語の表現に慣れさせる

単なる出欠確認もＳＥＧでは重要な授業の一環となるわけだが、本題は別にある。生徒全員と一対一の会話を終えると、本日の授業に入っていく。先生は「1日目と2日目に、私たちは２つのキャラクターについて話しました。それが誰だったか覚えていますか? では２人でパートナーとなって話し合ってください」と話し、机が近い生徒同士でパートナーを指定していく。生徒はそれぞれに向き合って互いに覚えていることを話し合う。

頃合いを見て先生がキャラクターの名前から確認していく。1日目には“Squuplx”という名前のキャラクターを扱ったようだ。続けて「それは動物 ?」「人間 ?」「青い? 黒い ?」「どこにいるの ?」「何歳 ?」「ハンサム?」「何が好き ?」などつぎつぎと問いかけ、答えさせていく。2日目は“Can’t fly”というキャラクターで、これも同様にさまざまな方向から質問していき、キャラクター像を明確にしていく。

意見が出尽くしたところで、先生がモニターに映像を映した。どうやら1日目と2日目に観た映像に出てくるキャラクターだったようだ。一連の流れは言ってしまえば前日までの復習であるが、出欠確認の時間も含め、決まったセンテンスをこれでもかというほど繰り返し、日本語での文法説明なしでも英語の使い方を体感的に身につけていくことができるようになっているのが分かる。

こうして十分に復習の時間を取ってから、新しいコンテンツに入っていく。本日の映像はどうやら猫が主人公のようだ。登場するシーンを数秒だけ見せて映像を止め、“What did the cat do?”。どう答えたらいいか生徒が迷っているのを見て“Did he touch the snow?”と例示すると、ようやく“smell.”と生徒。先生は“Did he smell the snow? OK, talk to your partner!”と呼びかけ、先ほどの２人組になって話をさせる。そして、映像の猫は登場してからまず雪のにおいをかいだこと、次に雪を触ったこと、続いて雪にジャンプしたことをみんなで確認したところで、猫が雪にジャンプした場面でストップしていた映像を再生する。映像には2日目に出てきた“Can’t fly”という鳥のキャラクターが再登場。snowball（雪玉）を猫に２回ぶつけたところで先生は映像を止め、“What do you think the cat will do next? Talk to your partner!”と再び話し合わせる。



このように頻繁（ひんぱん）に映像を止めては、「何が起こったのか」「どういう行動をしたのか」といった目に映る現状を一つひとつ答えさせることで、英語表現を感覚として覚えさせていくのだろう。さらに「これからどんなことが起こるのか」などのまだ目に見えていない部分を自分の頭で、あるいはパートナーと話し合いながら、考え抜いて言語化するという訓練にもなっているのだ。

映像を観終えたところでテキストから学ぶ時間に入る（テキストに基づいた宿題があるようで、宿題の回収もここで行われた）。テキストの今日のセクションを見ると、過去形と現在形の違いがテーマらしい。らしいというのは、どこにもそんなことは書かれていないからだ。テキストには「正しい表現と間違った表現を選ぶ問題」「正しい単語を書き入れる問題」が載っているだけである。最初に知識を与えるのではなく、問題を解いていく過程を通して多くの英文の例に触れることで、後から文法的な事柄を理解していくようになっているわけだ。

テキストを見るに「動詞に“ed”をつければ過去形になる」ことは2日目までに学んだようだが、本日のテーマは「過去形が“ed”にならない動詞」。たとえば go、take、eat、lose、sleep などだ。これらの表現を問題の英文を通して覚えていく。それも問題を解くだけでなく、何を食べたか、何を飲むのかなどを生徒にたずねながら、あるいはパートナーと話し合わせながら英語の表現の幅を広げていく。

ゲームで盛り上げながら英語の表現を学んでいく

後半はゲームの時間だ。パートナーと組んでチームで対戦するようだ。ゲームは、先生がある動物の特徴をヒントとして提示し、チームで答えを競うというもの。より分かりやすいように、先生は最初に“For example,”と例題を出す。“this animal is very tall. This animal doesn’t eat meat. This animal lives in Africa.”と言うとゲームの流れも例題の答えも分かったようだ。最後のヒント“This animal is yellow.”で、生徒は口々に“Giraffe.”と答えた。

このゲームの真骨頂（しんこっちょう）は単なる正解数ではない。あらかじめ各チームに 10 ポイントが与えられ、問題が出題される前にその問題に何ポイント賭けるか申請しなければならない。正解なら賭けたポイントが加算され、不正解なら賭けたポイントを失う。手持ちのポイントが増えれば賭けるポイントもふくらんでいくため、否が応でも生徒たちは盛り上がっていく。

第１問のヒントは“This animal likes to eat sugarcane and bananas. This animal has big ears. This animal’s skin is grey.”正解は elephant で全チームが正解した。再びポイントを賭けて第2問。“This animal has very long claws. This animal doesn’t like surprises. This animal goes to the river to find food.”全員首をひねっている様子だったが、“This animal sleeps through the winter.”でピンときたようだ。正解は bear。第3問は“This animal is lazy. This animal has long claws. This animal sleeps a lot. The boy animals are more lazy than the girl animals. The girl animals catch the food. The boy animals are lazy. The boys and girls look different.”で答えは lion。第4問は“This animal likes to eat a corns and nuts. This animal likes to dig. This animal sometimes eats baby snakes. Long time ago, people used to hunt this animal. Now only sometimes. This animal has short legs.”難問だったようで、生徒からは“One more hint.”の声があがる。先生は最後のヒントとして“This animal has tusks.”正解は wild pig（イノシシ）だ。正誤だけでなく戦略差もあり100ポイントのチームから0ポイントのチームまで出て、大いに盛り上がった。

授業時間中、とにかく先生はしゃべり続けている。時にはゆっくりと身振り手振りをつけて、時には早口で。生徒が分からなそうな単語が出ても、ヒントを英語で示すだけで、その言葉が意味することを想像させていく。たとえば tusk も、“like teeth, not teeth but tough.”という説明になる。分からない単語があっても、そこで思考を止めてしまわずに進んでいくことをうながしていく。

外国人パートでは、特に中学生のうちはとにかく英語をシャワーのように浴びることで日本語とは異なる言葉のリズムを身体で覚えていくことが重要だ。中学入学時から定期的にネイティブの英語にじっくり接することができるのは大きなアドバンテージになるはずで、ＳＥＧの英語多読の人気が高いのもうなずける。

※英検®は、公益財団法人 日本英語検定協会の登録商標です。

SEG® 英語多読

受講生の声

中学入学を控えたみなさんは、英語多読のどんなことに期待しているのでしょうか。授業の感想も含めて聞いてみました。

楽しみながら英語が身につく予感

ＳＥＧに英語多読の授業があることは自分で調べて知りました。面白そうな授業だと思ったため、春期講習から受けることにしました。外国人パートは、思っていた通り、楽しみながら英語が身につく感じがしてとても気に入っています。中学受験の勉強を本格的に始める小４まで英会話に通っていたこともあり、Taylor先生が話す英語もだいたい何を聞かれているか分かりますし、分からない言葉があっても「こんなことを言っているのではないか」と考えながら聞くようにしています。英語多読に通うことで、これからどんどん英語の力が伸びそうな気がしていて、とても楽しみです。

◆A.T. さん（筑駒）

先生との英語でのやりとりが楽しい

この１年間は中学受験の勉強ばかりで何も習い事をしていなかったため、受験が終わったら習い事のような感じで塾に通いたいと思っていました。最初は別の塾を考えていましたが、途中から英語多読が気になり始め、ＳＥＧに通うことにしました。６歳くらいから英語の教室に通っていたこともあって英語は比較的得意な方なので、気楽に受けています。外国人パートは、Taylor先生がとにかく楽しいのが嬉しいです。日本語だとディスカッションはあまり得意ではありませんが、英語だとなぜかやりやすく感じ、授業の中での先生とのやり取りが気に入っています。

◆A.S. さん（晃華学園）

https://www.seg.co.jp/
03-3366-1466
［月～金］14：00～21：00 ［土］13：00～21：00
〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-19-19
中学１年～大学受験
科学的教育グループ SEG®